

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	坂東 志保	指導教員 (主査)	渡邊 勉

論文題目	20 代・30 代女性膠原病患者のボディイメージの検討
------	-----------------------------

本文概要

【問題と目的】 膠原病とは、Klemperer(1942)によって提唱された疾患概念であり、発症年齢は 20 代～40 代に集中し、1：9 の割合で女性に多い病気である。治療のため服用するステロイド製剤の副作用や症状は、患者の生活の質(以下、QOL)や病気に対する不安認知に影響を及ぼしていることが明らかにされている(塩沢, 2012 ; 芦原, 2002)。副作用の中でも外見上の変化が、患者の精神面と関連していることがこれまでに指摘されており、橋本(2012)は、膠原病の 1 つである全身性エリテマトーデス(以下、SLE)患者の療養を困難にさせ、QOL を下げる理由として、SLE そのものの症状他に、ステロイド製剤の副作用として生じる、ムーンフェイスや中心性肥満などの外見上の変化に対する苦悩を挙げている。また、SLE 患者の QOL の低さと最も関連しているのは“ボディイメージ”であることも明らかにされている(Jolly et al., 2010)。膠原病に罹患している 20～30 代女性は、病気を抱えながら、様々なライフイベントを過ごすことになる。なかでも、膠原病の治療で用いられるステロイド製剤の副作用によるからだの変化とそれに伴う自己受容の問題は軽視することはできないと考えられる。第一に、20～30 代の女性膠原病患者のボディイメージと自己受容の観点から QOL 及び病気に対する不安認知との関連を明らかにする。第二に、罹患後のからだの変化、これまでに受けてきた支援、受けたい支援について明らかにすることを目的とする。

【研究方法】 20 歳～39 歳の女性膠原病患者を対象に、Web でのアンケート調査を実施した。使用尺度：①フェイスシート(年齢、職業、病名、発症年齢、現在の体調、現在服用中の薬)②難病患者に共通の主観的 QOL 尺度(川南, 2003)③ボディイメージ・アセスメントツール(藤崎, 1996)④病気関連不安認知尺度(森本, 2001)⑤自己受容尺度(櫻井, 2009)⑥自由記述(からだの変化、これまでに受けてきた支援、受けたい支援について)

【倫理事項】 「目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」に書類を提出し、審査非該当の審査結果を得た。

【結果と考察】 調査回答者数は 44 名だったが、20 代・30 代以外の回答者を除外し、40 名を分析対象とした。回答者の過半数は、現在体調が安定しており、治療のため副腎皮質ステロイドを服用していた。膠原病患者はボディイメージが低いと、自己受容も低いことが示され、ボディイメージはもともと自己概念の構成要素として自己評価に密接に関連しており、身体の変化に伴い自ずと自己に対する認知や知覚が変調をきたしていくため(小林・笹川・渡辺・平松, 2004)、ボディイメージと自己受容が関連を示したと考えられる。また、自己受容が低いと QOL が低く、ボディイメージが悪いと病気に対する不安認知が高いことが明らかとなった。患者の困り感が QOL にある場合は、自己受容に、病気についての不安がある場合は、ボディイメージにアプローチすることが有効である可能性が示唆された。対象者の過半数は、副腎皮質ステロイドの副作用による、ムーンフェイスに苦悩していた。からだの変化が起こることで、精神的負担や日常生活に支障を与えていることも明らかとなった。膠原病患者に対する支援として、患者個人のどの困り感に対して、専門家・当事者・周囲・国からの援助が必要なのかを多角的にアセスメントし対応することが重要であると考えられる。

【主な引用文献】 Ascheim, J. H. (1981). The adolescent and systemic lupus erythematosus : A developmental and educational approach *Issues Compr Pediatr Nurs*, 5, 293—307.